

な未開の砂丘地に

< 2 >

柏崎市の小高い赤坂山に、寒風に立ち向かうように胸像が立つ。市長を四期務め、東京電力柏崎刈羽原発誘致に自らの政治生命を懸けた小林治助(故人)である。その視線は今も原発に向いている。

小林と原発との出会いは、一九六三年の市長選で助役から初当選したころにさかのぼる。翌月、当選のあいさつ回りで会った人物から突然、アドバイスを受けた。「原子力発電を柏崎で考えませんか」

柏崎刈羽原発
安全神話

市長奔走

声の主は柏崎を拠点の一つとする理研ピストンリング工業(リケン)の会長・松根宗一(故人)「愛媛県まで連日(つ)と続けた出身」だった。電力業界でつくる電気事業連合会の副会長に五九年に電力会社生え抜き以外から初めて就任し、国内外のエネルギー事情に精通していた。

石油の街の危機

松根が同社会長となったのは五四年五月。時を同じくして東電の顧問にも就いた。田が林立し、かつては「石油の街」と呼ばれた。石油

陸の孤島」打開狙う

誘致地域振興の起爆剤に

いた。小林は理研関係者と会った際に、柏崎で原発を造る話の検討員会を聞かされたという。小林の私設秘書の役割もしていた長男正明(六六)後に治助に改名しはこう振り返る。「父は一期目の真ん中ごろから原発の勉強を本気で始めた。深夜三時ごろ



市民の憩いの場「赤坂山公園」にある小林治助元市長の胸像。誘致に執念を燃やした柏崎刈羽原発は中越沖地震で被災し、全号機が停止したまままだ「柏崎市

出は住民の悲願だった」と原発誘致前の状況を説明する。隣の刈羽村はさらに深刻だった。財政難のため六四年、「準用再建団体」に転落、国から財政再建計画の策定を命じられていたからだ。今でいう自治体の倒産に当たる財政再建団体に近い状況である。学校建設などによって生じた財政赤字は三千万円に迫っていた。二〇〇六年度の財政力指数は二〇〇六年度の財政力指数で県内一を誇る現在とは雲泥の差だ。

「宝」開発の約束

実は当時、柏崎市と刈羽村には共通の課題があった。同市荒浜地区と刈羽村にまたがる砂丘地の開発だ。市が五四年に旧荒浜村と合併した際、強い要望を受けていた項目だった。地域振興の解決策が見つからず、低迷する二市村にとつて原発建設は起爆剤と映った。

「宝」はなくてはならない」と、金がないのに仕事はしろと求められた。準用再建団体に陥った当時に財政係を担当し、後に五期村長を務めた近藤光夫(八八)は苦難の日々を思い起こす。

(文中敬称略)